

IV 短期大学が独自に設定した 基準による自己評価

基準 A 地域貢献

IV. 短期大学が独自に設定した基準による自己評価

基準 A. 地域貢献

A-1 地域社会への貢献

A-1-① 自治体との連携事業

A-1-② 地域の人材育成事業への協力

(1) A-1の自己判定

基準項目A-1を満たしている。

(2) A-1の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

A-1-① 自治体との提携事業

八戸学院大学短期大学部（以下、本学）は開学以来、地域社会との連携を重視した学校運営を行ってきた。すなわち、各学科の教育理念・教育目的に基づき、それぞれの特性を活かして、地域社会の発展に寄与しうる人材の育成を目指し、地域に密着した教育活動を行っている。

平成26(2014)年には、本学および八戸学院大学の有する多様な専門性と人的・物的資源を地域において活用するために、八戸学院地域連携研究センター（以下、地域連携研究センター）が設立された。

本学と近隣自治体との連携協定について、表A-1-1に示す。

表A-1-1 本学と自治体との協定締結一覧（令和2(2020)年5月1日現在）

市町村	締結年月日	協定書名称
新郷村	平成26(2014)年3月27日	連携協力に関する協定書（包括連携／大学・短期大学）
階上町	平成27(2015)年3月26日	連携協力に関する協定書（包括連携／大学・短期大学）
五戸町	平成27(2015)年4月16日	連携協力に関する協定書（包括連携／大学・短期大学）
八戸市	平成27(2015)年12月24日	八戸学院大学、八戸学院短期大学及び八戸市における健康福祉連携協力に関する協定書
南部町	平成28(2016)年3月23日	連携協力に関する協定書（包括連携／大学・短期大学）
三沢市	平成30(2018)年3月22日	地方創生に係る包括連携協力に関する協定書 （大学・短期大学部）
三戸町	令和元(2019)年8月20日	連携協力に関する協定書（包括連携／大学・短期大学部）

これらの自治体から本学に協力の要請があった場合は、地域連携研究センターがそれを受け、学科に下ろして検討するか、それぞれの事業に関連する教員に直接的に依頼する。令和2(2020)年度は新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、活動には大きな制限が課せられたほか、中止になったものも多かった。例年の概要と令和2(2020)年度の実績を以下に述べる。

1. 八戸市

八戸市（まちづくり文化スポーツ部新美術館建設推進室）の委託を受け、幼児保育学科の美術教員が令和元(2019)年度より「八戸市アートの学び事業」に参画している。令和2(2020)年度は『アート思考を経営に活かす』『美術館と新世代のまちづくり』をテーマとする「アートビジネスミーティング」がリアル会場とオンライン・ライブ配信の2本立てで開催され、コーディネーターとして登壇した。

【資料A-1-1】令和2年度 八戸市アートの学び事業実施報告書

また、令和3年秋にオープン予定の八戸市新美術館には地域連携研究センターのオフィスが入居し、本学および八戸学院大学が教育機関として連携する予定である。その一環として、八戸市新美術館プレ企画「国際・子ども文化、未来を語るフォーラム」に参加した。

2. 階上町

階上町連携事業として、例年、「はしかみ臥牛山まつり」「階上町民文化祭」「はしかみいちご煮祭り」に本学の学生が参加し、ステージでアンパンマンのダンスを演じたり、来場した子どもたちに多様な遊びの場を提供したりしているが、令和2(2020)年度はすべて中止となった。

A-1-② 地域の人材育成事業への協力

1. 教員免許状更新講習

平成21(2009)年度から幼稚園・小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の教員を対象として、夏と冬の年2回、教員免許状更新講習を八戸学院大学と合同で開催している。平成27(2015)年度からは「子ども・子育て支援新制度」により保育士の受講が始まったことで、全体の受講者数が増加するとともに、保育士・幼稚園教諭の割合が増大した。これに対応するため、幼児教育に関する選択講習を増やすとともに、令和元(2019)年度は選択必修科目の担当者に新たに幼児教育を専門とする教員を追加した。こうした努力によって地域社会からは一定の評価を得てきたが、令和2(2020)年度は中止となり、令和3(2021)年度も中止が決定した。

2. 青森県子育て支援員研修

青森県の要請を受け、平成28(2016)年度より子育て支援員研修を実施している。講師は本学教員（専任および非常勤講師）と八戸学院大学教員により構成されており、例年80人程度の参加者を得ている。令和2(2020)年度は新型コロナウイルス感染防止の観点から会場を他所に移して実施し、例年と同程度の参加者があった。

【資料A-1-2】子育て支援員研修日程表

3. 研修会への講師派遣

幼児保育学科・介護福祉学科ともに、地域の研修会等に多くの教員が講師として協力している。近年は「保育士等キャリアアップ研修の実施について」（平成29年4月1日雇児保発0401第1号厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課長通知）を受けて、保育者を対象とした研修への協力要請が増大している。

令和2(2020)年度は新型コロナウイルス感染拡大のため、対面よりもオンラインでの講演や動画による研修が多く行われた。実績としては、青森県運営適正化委員会主催福祉サービスに関する苦情解決事業研修会、青森県障害者虐待防止・権利擁護研修、児童発達支援センター「桂堂学園」保護者向け研修会、青森県放課後児童支援員認定資格研修、保育のデザイン研究所主催保育士等キャリアアップ研修「障害児保育分野」、青森県保育連合会主催保育士等キャリアアップ研修「幼児教育分野」、八戸市私立幼稚園協会家庭教育学級全体研修会、八戸市ファミリーサポートセンター提供会員養成講習会、青森県介護支援専門員研修向上委員会（研修プログラムの構成）、三戸町避難所運営訓練「公衆衛生」、階上町ほのぼの交流協力員・生活介護支援サポーター研修、青森県社会福祉協議会青森県福祉人材センター主催福祉施設就労支援・体験講習会等があった。

4. 保育の学校・介護の学校

地域の保育者に対するリカレント教育の場を設け、卒業後も学び続ける保育者を支援するために、平成28(2016)年度より本学主催による「保育の学校」を企画運営しており、令和元(2019)年度は8月24日に開催した。これは八戸学院大学人間健康学科が開催していた「介護の学校」をモデルとしており、基調講演のほかに各自が希望する分科会に参加する方式で丸一日をかけて実施している。

八戸学院大学人間健康学科による「介護の学校」は平成28(2016)年をもって終了したが、令和元(2019)年度は本学に新設された介護福祉学科が企画し、「保育の学校」と同日に開催した。

さらなる内容の充実と運営の合理化によって多数の参加者の獲得を目指していたが、令和2(2020)年度は中止となり、令和3(2021)年度も中止が決定した。

5. その他

教員はそれぞれの専門性を基に、さまざまな社会活動に取り組んでいる。例として、青森県待機児童対策協議会委員、八戸市子ども・子育て会議委員、三沢市子ども・子育て会議委員、おいらせ町子ども・子育て会議委員、八戸市社会教育委員、多文化都市八戸推進懇談会委員、八戸市景観審議会委員、あおもり食育サポーター、認定特定非営利活動法人成年後見センターもりおか会員、社会福祉法人八戸市社会福祉事業団理事・評議員、田子町地域・障がい・子ども福祉運営協議会アドバイザー、岩手県社会福祉士会・権利擁護センターぱあとなあ岩手副委員長、岩手県社会福祉士会盛岡ブロック役員等があり、団体の理事、評議員、監事を務めている教員も少なくない。

(3) A-1の改善・向上方策（将来計画）

今後も八戸学院大学と協力し、地元自治体との連携を深め、本学の専門性・教育力を生かした地域貢献を行う。特に、リカレント教育に関しては運営形態を含めて検討を進める。

A-2 地域に密着した教育・研究

A-2-① 青森県南地域をフィールドとした教育活動

A-2-② 本学の特色を活かした教育研究活動

(1) A-2の自己判定

基準項目A-2を満たしている。

(2) A-2の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

A-2-① 青森県南地域をフィールドとした教育活動

本学では、学生のほとんど（過去5年間の平均で約98%）が青森県南もしくは岩手県北地域から入学している。在学中、両学科とも地域の施設で実習を重ねるが、それだけでなく、ゼミナールその他の授業、行事、ボランティア、サークル等で地域をフィールドとした教育活動を行っている。

1. ゼミナール

幼児保育学科ではゼミナールが卒業必修科目となっている。各ゼミナールは教員の専門性を生かした活動を展開しており、ゼミナール活動がサークルに発展していることもある。それらを主体として、地域のさまざまな場において、ウインドアンサンブル、ハンドベル、プレーパーク、運動遊びの指導、障害児との交流、親子料理教室、現代芸術教室「アートイズ」などの多彩な活動が行われている。

令和2(2020)年度は全般的に活動の場が狭められたが、ハンドベルコンサート2回、親子料理教室2回、プレーパーク1回の実績があった。（アートイズについては後述）

2. 子どもフェスタ

幼児保育学科2年生は卒業前の2月に開催される八戸市主催の「はちのへこどもフェスタ」において、2年間の学びの集大成である「ミニオペレッタ」発表を行う。これは幼児保育学科の卒業必修科目「総合表現」に位置づけられるもので、4つのグループがそれぞれ工夫を凝らした舞台を披露する。毎年学生の保護者や卒業生だけでなく、地域の子どもと保護者が大勢来場し、アンケートには多くの好意的なメッセージが寄せられている。

令和2(2020)年度は「こどもフェスタ」内の「ミニオペレッタ」以外の催しは中止になったが、「ミニオペレッタ」は新型コロナウイルス感染対策のために会場を例年より広い八戸市公会堂ホールへと移し、客席の間隔を空けて実施した。舞台が広い上に音響や映写の設備が整っていることもあり、例年以上に見応えのある舞台が演じられた。

【資料 A-2-1】「ミニオペレッタ」資料

3. 八戸七夕祭り

地域に根ざした大学として、地域行事である八戸七夕祭りの前夜祭で行われる「八戸小唄流し踊り」に例年参加している。

幼児保育学科ではこの活動は体育と美術のカリキュラムに位置づけられており、毎年1年生の美術の授業で七夕祭りの吹き流しを制作し、中心街の飾り付けに寄与している。学生らしい創意工夫を施した吹き流しは平成28(2016)年に最優秀賞を獲得し、その後も毎年優秀賞を受賞している。

令和2(2020)年度は七夕祭りが中止となったが、郷土を愛する心を育む活動として、体育の授業での流し踊りの練習と美術の授業での吹き流し（学内向けに小さいサイズのもの）の制作は継続した。完成した吹き流しは学生ホールに飾り付け、学内で流し踊りのイベン

トを実施した。

【資料 A-2-2】「流し踊り」資料

4. その他の授業における地域との交流

幼児保育学科では例年「健康」と「環境」の授業のコラボレーション活動として、市内の保育園園児と交流している。令和2(2020)年度はオンライン交流会として、2年生80人が8グループに分かれ、それぞれ手遊び・紙芝居・ダンス・運動遊びのプログラムを作成し、オンラインで園児と交流した。

令和2(2020)年度の新しい活動として、青森県環境生活部青少年・男女共同参画課からの依頼を受け、介護福祉学科「地域活動と社会貢献」の授業を活用して、中・高校生を対象とした「他人を思いやり命を大切にすることを育む対話集会」に学生がファシリテーターとして参加した。

5. ボランティア

本学は地域に根ざした高等教育機関として、地域の多くの施設からボランティアの依頼を受けており、学生に対してはキャンパス外の貴重な学びの経験として、ボランティア活動を推奨している。活動内容はさまざまだが、保育所や幼稚園、小学校、福祉施設の行事の運営補助やステージ出演が多い。しかし、令和2(2020)年度は学校の方針としてボランティアはすべて中止とした。

6. はちがくフェス（学園祭）

本学では学園祭を教育の一環と位置づけ、日頃の学習の成果を発表するとともに、来場者と交流して学びを深める場としてきた。例年、幼児保育学科では各ゼミナールが主体となって子どもが楽しめるさまざまな遊びや造形活動を企画運営する「子どもの部屋」、「ピアノコンサート」、「ウインドアンサンブルコンサート」、「ハンドベル演奏会」、「子どもの体力測定」等を実施しており、介護福祉学科では開設初年度に「介護体験コーナー」を運営した。

令和 2(2020)年度は学生と教職員のみで実施したため、これらの企画のほとんどは実施がかなわなかった。

【資料 A-2-3】「はちがくフェス」パンフレット

A-2-② 本学の特色を活かした教育研究活動

研修会等とは別に、教員の持つ専門性を生かし、一般市民を対象として継続的に行われている活動がある。これらは地域貢献活動であるとともに、教員の実践的研究の場であり、参加する学生にとっても貴重な学びの場となっている。

1. 現代芸術教室「アートイズ」

幼児保育学科の美術教員が現代芸術教室「アートイズ」の主宰を務め、八戸市との連携事業に参画するほか、さまざまな機会にワークショップを開催し、子どもが造形活動を通じて創造性を広げる場を設けている。子ども・保護者からの評価はきわめて高く、リピーターの参加者が多いのが特徴である。

令和2(2020)年度は八戸市との連携による「ハチノヘブルー2020」「是川縄文アートプロジェクト2020」、おいらせ町との連携による「自由の女神 変身グッズを作ろう!」を実施した。また、青森県の事業である「あおもりオベーション」にも参画した。このうち「自由の女神」は単発のワークショップだが、それ以外は長期間に渡るプロジェクトであり、「ハチノヘブルー」「あおもりオベーション」はコロナ禍に由来する活動であった。

【資料A-2-4】「アートイズ」リーフレット

2. ウォーキングクラス

平成26(2014)年度より地域の高齢者を対象として、本学教員と学生スタッフ（ワークスタディ）が、健康促進のためのウォーキングクラスを本学体育館で週2回実施している。

令和2(2020)年度も参加者の要望を受け、新型コロナウイルス感染対策を施した上で活動を継続した。

【資料A-2-5】「ウォーキングクラス」リーフレット

3. 1Park（わんぱーく）

従来の公園等とは異なり、子どもが自由に遊びを展開することができる場「プレーパーク」を作る活動が全国的に拡大している。本学では幼児教育を専門とする教員がこの活動を実践しており、地域のさまざまなイベント等に参加し、ゼミナールの学生とともに冒険遊び場「1Park（わんぱーく）」を提供している。保護者からは、子どもが夢中になって遊ぶ姿に新鮮な感動を覚えたといった高い評価が毎回寄せられている。

令和2(2020)年度は地域のイベントの多くが中止になったため、開催できたのは1回のみであり、参加者も少なかった。

【資料A-2-6】「1Park」リーフレット

4. ハンドベル

前述のとおり、幼児保育学科の音楽の教員がゼミナールとサークルでハンドベルの活動を行っており、さまざまな機会にミニコンサートを開いて成果を披露するとともに、子どもにハンドベル体験を提供している。また、卒業生有志から成るハンドベルのグループ「HGJCリンガーズ」を長年運営・指導しており、令和元(2019)年度は八戸市公会堂でコンサートを開催した。

令和2(2020)年度は活動の場が狭められたが、クリスマスコンサートを2つの会場で開催した。

【資料A-2-7】ハンドベルコンサートリーフレット

5. ピアノコンサート

令和元(2019)年度に引き続き、令和2(2020)年度も被爆ピアノ平和コンサートを企画・開催した。今回は新型コロナウイルス感染拡大を考慮して、学内のホールにおいて、クラス別の授業として実施した。また、八戸市白山台小学校や八戸市ポータルミュージアム はっちで開催されたコンサートでは、ハンドベルやピアノの演奏を行った。

【資料A-2-8】被爆ピアノ 平和コンサート資料

6. 絵本の制作と読み聞かせ

読み聞かせサークルの学生が中心となり、八戸市の令和2(2020)年度学生まちづくり助成金を利用して、八戸をテーマとする『せんべいくん、なんぶのまちへいく』『はちのへのうみ』『みほののもり』という大型手作り絵本の制作に取り組み、法人内幼稚園で読み聞かせを行った。

【資料A-2-9】令和2年度学生まちづくり助成金報告書

7. 部活動支援

小学校の部活動の指導を保護者が行うようになったことに伴って、大学によるサポートの需要が高まっている。これを受けて、八戸市教育委員会を通して、八戸学院大学とともに八戸市立新井田小学校の部活動支援モデル事業に参画し、卓球を専門とする幼児保育学科の体育教員が指導を開始したが、令和2(2020)年に中断し、現在に至っている。八戸市立高舘小学校から依頼を受けた吹奏楽の指導は令和2(2020)年度に計10回実施した。

(3) A-2の改善・向上方策（将来計画）

令和2(2020)年度は多くの活動が中止になり、令和3(2021)年5月現在も事態は改善していない。短期大学は在籍期間が2年しかいないため、一度途切れると伝統の継続が困難となる。新型コロナウイルス感染症の収束後を見据え、形は変わっても活動を継続することが重要であり、課題でもある。

今後とも、青森県南地域をフィールドとした教育活動を積極的に展開し、学生の資質の向上に努めるとともに、卒業生を含む地域の人材育成の支援を行う。

【基準Aの自己評価】

本学は現在7つの自治体と連携協定を締結し、さまざまな地域貢献活動を行っている。

本学の地域貢献の多くは、地域の教員や保育者、介護従事者を対象とした教育活動である。外部からの要請を受けて公開講座を開催するほか、教員が出張講義や研修会で講師を務める機会が多い。また、本学教員が自ら立ち上げ、企画運営している公開講座もある。そのほか、地域住民を対象として継続的に行われている活動があり、地域から高い評価を得ている。

学生への教育としては、実習だけでなく、ゼミナール等の授業でも地域をフィールドとした活動がさまざまに展開されており、サークル、行事、ボランティアでも地域住民と交流をしている。このように地域との交流を通じた教育活動が本学の大きな特徴である。

地域をフィールドとした教育活動は、将来の地域発展に資する人材育成につながる活動であり、教員の研究、学生の教育の土台であるとともに、本学の魅力を地域に発信する重要な活動となっている。